

折口信夫

秘恋の道

持田叙子

Mochida Nobuko

慶應義塾大学出版会

折口信夫
秘恋の道

目次

序章	恋の宿命	7
第一章	痣 あざ ある子	14
第二章	名と家と、生殖の苦と	34
第三章	内なる女性の魂、えい叔母	53
第四章	あかしやの花の恋	80
第五章	歴史家への志	101
第六章	炎の帝都へ	122
第七章	霊と肉	137
第八章	劇作への夢	152
第九章	先生	171
第十章	帰郷	197

第十一章	大阪ダイナマイト	215
第十二章	わが魂の舟	231
第十三章	新しい波	246
第十四章	愛の家	262
第十五章	最高に純粹だった頃	273
第十六章	流動あるのみ	285
第十七章	清志恋ひし	300
第十八章	恋愛と写生——海やまのあひだ	314
第十九章	激震	340
第二十章	たぶの森から来た若者	363
第二十一章	多情多恨	388

第二十二章 魂の小説 402

第二十三章 恋の灯を継ぐ 426

終章 秘恋の道 453

あとがき 467

主要参考文献 471

初出一覧 478

折口信夫

秘恋の道

序章 恋の宿命

このうえない至上のひと。どこかにいる。きっと出会える。ひとすじに歌と学問にはげむならば、その清らかな白い道の先に必ずや、彼のひとは立っている。

面影はありありと胸に浮かぶ。濃いまつげに縁どられた瞳は聡明にかがやき、その底には碎けちる裂^れ帛^{はく}の青い気迫を湛えているだろう。胸は思わず抱きとりたいほどにやるせなく、薄くはかない。くらべて脚は細いながらも鋼のようにつよく鋭くしなやかに、風雨をおかして幾多の野や山を歩きぬく力を秘める。けれど両の手にただけば、その足首は少女のそのようにきやしゃ、てのひらの中に妙に溶け入る。彼のひとの手は——手はしろじろとひたすら優しい。

おさない頃から彼は、そのひとのことを夢にもしばしば見た。現実にはまだ出会わないひとに烈しく恋着した。学ぶことのすべては、そのひとに通じていた。そのひとは森の内奥に思いがけず虹彩をはなつて湧く池泉のように、樹々の梢をかすめて山々を渡る霧のように、山の端の夕映えに飛ぶ鳥のように、彼をせつなく焦がれさせた。あらゆる美しいものにそのひとの面影が映り、そのひととの至福にみちた

邂逅を予感させた。

この恋は幼児の頃から彼にとり憑き、生涯にわたって彼をながく哀しませ、飲ばせ、苦しめる。恋は彼にとつて人生そのものとさえいえる。しかしなぜ、そんなことになったのか。肉体のうつわに青くひよわな魂が入りこんでまだまもないうち、多くのおさな子がまだ母のあまい乳を吸ううちに、なぜ彼はいちはやく烈しく、彼方にいるひとを恋することになったのか。

大きくは、歌のせいなのにちがいない。幼稚園の頃から彼は朝寝する父の蒲団に呼び入れられ、あたたかい卵の殻のようなその中で、西行や芭蕉の詩歌、父ごのみの古い和歌を口うつしで授けられ、暗誦させられた。

この朝の一時をのぞけば子どもにはごく関心うすい父親の、それは唯一のやわらかな肌ざわりだった。家にも家族にも冷淡な父のこころの核を占める、詩歌への遙かないつくしみをかいま見た。

父により幼時すでにこの世のいとわしさを教えられ、とともにこの世の外にぼうつと花明かりする美しいなつかしい他の世界へのしきりなる空疎なあこがれごろを植えつけられたと、後になって彼はさみしく回顧する。

とりわけ歌への愛着は、若い頃はまず彼を内へ内へと孤独に籠もらせた。世間で常識的に用いられることばとは、全く異なる神韻しんいん縹渺ひょうびょうとしたことばの世界にひとり分け入った。みようみまねで自身も歌のことばを紡いだ。

七歳の頃に初めてつくった一首が伝えられる。父の教えてくれた西行や芭蕉の影響だろう、ひとり長く旅する歌である。

たびごろもあつさむさをしのぎつつめぐりゆくたびごろもかな

中学生の夏には家の蔵にひきこもり、勅撰二十一代集を読みとおしたという。読みとおしてついに、京極為兼ひきいる中世宮廷歌壇の生んだ玉葉集と風雅集とを、それまでの歌の常識をさわやかに破る、まことに図ぬけたものとして発見したという。

大阪の酷暑。生薬商をいとなむ実家の裏の、まわりの湿った地面にどくだみの白い花の咲き群れる、かびくさい蔵の中。ひといちばい汗かきの少年は、ごく薄い寝まきのようなものをかろうじて肌身につけ、胸を汗しとどに濡らし、ひざを折り頭をかしげ、世に忘れられた紙魚^{しみ}だらけの古い歌集に耽溺していたのだ。

歌のことなどゆめにも知らず、日々の暮らしに心身のすべてを使いつくす世間のにぎわしい盛んな人々と、自分とは大きく異なるのだという少年らしい誇りが、暑い一夏の孤独な学びをささえていただろう。とともにそれが、彼をひどく高慢にもしていたはずだ。

古びた世々の歌びとたちの吐息まじりのことばは、錆びついた鍵がいったん解かれればいとも蠱惑的なものとして、ひとりぼっちの少年の目前にひろがった。少年の孤独を優美につつむ繭ともなった。

そして……あまりにも暑い。ともすれば頭がぼうつと熱し、けうとい忘我の心地におちいる。まして歌のことばには明確な主体がない。作者と読者をへだてる垣がない。溶け入るように自分のところが、歌の小さな可憐なうつわの中にひき入れられる。

ごく自然に、男にも女にもなる。軒端の空をあおぐ。山の端に、綾なし色なす雲をながめる。恋をす
る。

歌とは、三十一音を主とする音調の核心に、空をさまよう恋の雲気や幻像のもろもろが吸いよせられてまつわりつき、もののあわれを形として結晶させるものだから——恋は現実恋する以前に、まっしぐらに歌びとの胸に襲いかかる。

歌に憑かれたとたん、恋に憑かれたひととなる。恋は、歌人にとっての宿命である。そのひとの人生にとってそれは、いいことなのか悪いことなのか。

少なくとも、女性を愛しえない少年にとってそれは、しごく甘美な愉悅であるとともに、苛烈というより他ない経験でもあったのではないだろうか。

愛については世間の制度にからめとられることを徹底的にいなみ、純にひたすら純に恋しつづけた彼は、つまりは生涯独身だった。結婚とは、世間と折り合いをつける不純で厳重な制度であると思われた。独身は彼には、必然の生活様式だった。

恋する欲びも悦楽も、悲しみも恥辱も人より多く知り、もののあわれが心身にとびきりの深い傷を刻むことを詩人学者として誇る一方で、結局はとぼん、とひとり。

おのが血も歌も学問も、ついには継ぐ子どものいない空しさに、虚空をあおいで笑いたいような気もちになることもあっただろう、とくに自分のたどりつく先が寒風吹く枯野であることを明らかに見きわめた老年期には。

五十四歳の彼にこのような一首がある。

古き代よの恋ひ人どものなげき歌 訓みよ積みながら 老いに到とれり

(歌集『遠やまひこ』)

この歌を詠んだ数か月後に、太平洋戦争が起こる。世界戦争の暗い雲がもくもくと広がりとつある。心をこめて歌と学問の清らかな道を授けた若い教え子たちの身の上に、とりわけ濃い黒雲が垂れる。

これからの向老期に、一切すべてを剥ぎ取られ、奪われ尽くすという予感が一抹ある。老いぼれた身が、ひとり机の前にぼつんと残る。それにしても今まで何ほどのことをしてきたのか。あらためて冷徹にかえりみられる。

ああ、つまりは生涯かけて、日本の古い恋の歌の哀しさを読みとってきたのだった。しきりに焦がれ、魂を傷くさまよわせたけれど、現実の恋が華やかに烈しく自分の人生に火をつけ、身も魂も燃え輝かせたことはついになかった。その代わりには冷えまさる独り身にて、あかあかと燃える恋の歌の情熱にかじかむ手をかざしてきたのだった。恋びとたちの青い憂いを、歌をとおして盗んだのであった。

一首からはまず、そうした濃い自嘲の声がひびく。老いを嘆くおきなうた翁歌の伝統でもある。戦さの世には役立たずの、まして老いぼれのふがない文弱のわれ。机の前で古い書物にしがみつく、それがつまりは生涯かけた営みだったのか。

しかし翁歌の自嘲とは、誇り高い本懐をつつむ韜晦である。内心、彼はこうもつぶやいている——世よ人よ笑え、そして。自分はこの営みにいのちかけて、悔いない。戦い始まるとも、この営みに身をさ

さげつづける。なぜならやまとだましいとは、恋。恋のあわれこそ、民族の精神を比類なく鍛えあげ、ゆたかに育ててきた天授の靈性なのだから。

これは、彼の学問と詩作の本質である。多くを奪われる予感に襲われてかえって思いが澄み、彼の志がもろもろの贅肉をそいで一本の冬の裸木のように、あらわに端的にその本質をしめして立ちつくす。

この志は、敗戦後の彼の創作や行動にもまっすぐ反映される。彼はひたすらに、恋も知らずに戦いで青春をすりつぶした若者たちのことを案じた。誰よりも早く、彼らの負うころの深い傷をおもんばかった。美しい愛しいものをみる歓びのみが、彼らの傷をいやすことを信じた。

ただちに彼は若者のために、「やまと恋」「日本の恋」などの詩をつくった。おとめたちに請うて焼け残った晴着をきてもらい、大学の講演会にてそれらを朗詠させた。

恋せよ、と彼は若い人々に呼びかける。恋して心みやびにととのえよ。敗れたくやしさに固くとぎした心を、恋の感動でよみがえらせよ。恋がよみがえれば、おのずと国土はよみがえる。

われ以外のひとを想う清らかな思慕が、国土をおおう恨みや嘆きをはらい、枯木にみどりの芽をあたえる。ふたたび水が流れ、花がひらき、沃野が育つ。「若き日は いとも貴し」「恋を思はね」「倭恋 やまとこひ

日の本の恋 妨ぐる誰あらましや」「美しき 日の本の恋」。

時には投げ出すように絶望的に、彼はこうも叫ぶ、「恋の亡びた日本なぞ どつかへ行^{いっちょま}へ」。

恋の詩人である。恋の学者である。恋は彼のまことの骨である。もののあわれを知る青い哀しみで、焼け野をうるおそうとした。恋の文学としての日本文学の力を、深く信じた。自身の人生の窮極の意味も、清らを尽くして恋することにあると思ひさだめていた。

時には人目もかまわず、想いをつらぬいた。ぶざまと醜惡、なさけない滑稽にまみれた。人から指さし、陰で笑われたことも少なくはなかったろう。その人生は特異で純で、目がさめるほど美しい。一方、人なみでなく奇怪な、彼のかんだかい大阪なまりの声のようにあくどく目立ち、ひんしゆくを受ける偏^{へん}頗^ばなものでもある。彼につよく魅せられる人もいる。忌みきらう人もいる。

恋にいのちの重心を傾けた。ふつうならばすぐに忘れ去る未熟な、片おもいのさみしい思慕の水泡の一つぶ一つぶまでも決して手ばなさず、胸の底にあたため幾重の想いをかさねてそこから、恋を至純の靈性として尊ぶ日本の歌、ひいては神信仰と文学の宿命を考究した。

源氏物語のあらわす恋のよろしさを、主人公の光源氏のつよい心の持続力、ひとたび恋した面影を胸に永遠に結晶する執着に感受した。ながく忘れず恋うその姿は、自身の肖像でもある。

ほのかに哀しく少年のように想い、時に烈しく身体ごと相手にぶつけて立ちほだかり圧倒し、そして敗北し、恋の坂を傷だらけで転がり落ちた。苦しい経験は彼の目を、恋の歛びと悲しみの色に染まる日本文学と日本人の壮大なこころの歴史にひらかせた。

その情念と思索の相たゆたう摩訶の世界へ、これより深く静かに降りてゆきたい。確実に彼の内側へといたる螺旋の道を見きわめ、たどるつもりである。

第一章 痣ある子^{あざ}

いつのまにか、市場町のざわめきは潮のように引き、陽の色がさむざむと陰っている。そういえば表のくすりやの店先に、人声もしない。奥の台所から、たつぷりと昆布をおごった美味しそうなおつゆの匂いがただよってきて、えいは編棒を動かす手先から顔を上げた。

まだ若くて健康な胃が、とたんにぐうっと鳴りそうになり、あわてて丹田に力をこめて腹をおさえる。まわりの少女たちに聞かれてはならない。いつも店番がいそがしくて、昼は手のあいた者がてんでにお茶漬をかきこむくらいだから、夕方にはげっそりと空腹になっている。

うっかりしていた。この子たちももう家へ帰さねば。うつむいてせつせと編む五人の子はみな近所から来ているとはいえ、川沿いの市場筋を暮れてから、女の子に歩かせるわけにはゆかない。

ただでさえ、よそ者がたくさん入りこみ、市場へと荷をはこぶ船や車がひっきりなしに行きかう郊外のこの辺りは、人さらいが出るなどとも恐がられる。木津川こわい、何かがいるぞと幼児をおどす、こんな子守歌もあるくらいだ。

ねんねころいち天満てんまの市場

大根そろえて舟に積む

舟に積んだらどこまで行きやる

木津きつや難波なんばの橋の下

橋の下にはおかめがおるぞ

おかめ出てこい子がだまる

木津や難波の橋の下、という歌の文句がいかにもわびしい。子どもを叱る時に、お前は橋の下から拾ってきた子や、悪さするとまた橋の下へもどすぞ、などと言うのもこの町の人がよく使う、おどし言葉である。土地の柄が荒い。

くすりやの岡彦さんの、ハイカラな東京帰りのえいさんが、ただで編物を教えてくれるというので、親たちはよろこんで娘を寄こしている。

えいさんのお道楽、とおだてられているけれど、もちろん利ざとい商いの町の人々は陰で、編物教えるついでに店の売物の毛糸売りつけるんや、頭下げんで逆に下げられて、綺麗な顔して商売するやなんて、さすが学問したえいさんの利巧な発明や、と舌をだしている。そう陰口いわれていることを、当人のえいも心得て、しらん顔している。こんな狐と狸の化かし合いは、かまびすしく青物市や魚市の立て込むこの町の、そこここにある。

ほな、終わりにしましよ、ご苦労さんでした。皆さん、ようおしまいして、というえいの合図をしおに女の子らは立ち上がり、編棒ごと色とりどりの毛糸玉を各自の袋にしまい、そこらの毛糸くずを始末する。そこまで監督するのがしつくと、えいはそれとなく目を光らせる。

いつも思うことだけれど、やっぱり上野のひでさんが何やらしても図ぬけているなあ、この子見てみると胸がほくほくして嬉しくなるわ、と心の中でうなずく。

頬を紅潮させて、畳に落ちる毛糸くずを一つも見逃すまいとみつめるひたむきな横顔の、愛らしさ。お煙草盆ゆって、すっきりと出した耳たぶの清らかさ。すなおで行儀がよく、芯がある。

そもそもこの子の手がける編物が、他の子とは大きく異なる。それも人柄を表わす。他の四人がいつまでも単純な手袋や襟巻にかかずらうのに、この子は早く初手はすっかり吞みこみ、今は花の形を編んでから一つ一つそれらをつなげてできる、華やかなショールに挑んでいる。

自分ではなく、母のためのものだという着想もけなげである。みんなが編物はいろいろの毛糸で編むものと決めこんでいた最初から、この子は思いきり綺麗な色をとりどりに使うことを工夫していた。

人間の知恵やらたしなみいうものは、小さい頃からこんな風に内側から輝きほとばしるものなんやなあ、なんや恐いし、とえいは、つくづく感じる。

子どもが内に秘めるそうした資質を見ぬき、見守るのが、えいには何とも楽しい。母や姉にも、えいさんは女学校を出たし、東京の学校へも行ったんやから、おなご先生になったらよかったなあ、としばしば言われる。そうかもしれない。

しかしざわざわした広い教室で、鼻たれ小僧なんか教えるのは御免である。考え深いかしい子が好

きなのである。えこひいき、ひいき倒しのあかん先生、と口のわるい生徒にはのしられるかもしれない。やはりこうして、気心の知れた家の子や近所の子をかわいがるのが性に合っている。

氣をつけて、より道せずにお帰りと店の前に立って少女たちを見送る時には、ほとんどが店と住居を兼ねる通りの家々の軒庇のむこうに広がる夕空が、うつすらと茜色にいろづいていた。川筋の光る町角に少女たちの姿が消えるまではと、立ち去りかねて送るえいの心をさとするのか、上野ひでだけがもう一度ふり返り、ちょこんとおじぎして帰ってゆく。

ああ、やはり違うものだ。あの中でうちののぶさんに似あうのは、何というても、ひでちゃん。ひでちゃんとのぶさん。小さい頃からのおなじみやし、年も似あうてお雛さまの一対や。——うちもないと思いつつも、一年ほど前に、ひでが編物を習いに来るようになってから、何度も心のなかで二人を並べ、色々想像してしまう。

たぶん、うちはまだ結婚はせえへん。けど、のぶさんとひでさんが側におるなら幸福や。さぞ賢いええ子が生まれるやろ。その子取り上げて、あやして世話してお婆はんになれたら、それはそれでええなあ。

ひでちゃんも、のぶさんのことは好きやろう。あんなに賢い、本のことよく知っている子はこの辺りには、とんと居らんもの。ここら駆け回ってる子は、青鼻たらした、どんくさい悪餓鬼ばかりや。ああ、せやけどそうやった、あのことがあった、そうやった——。

うちののぶさんへの誇りがこみ上げる一方で、えいは胸につかえる思いで、先ほど見とれたひでの愛らしい横顔を思い出した。ホクロひとつない、すべすべの陶磁器のような白い肌。川べりの烈しい陽に

浅黒く灼けた子も多いなかで、ひととき青みがかつた冴えざえとした面輪。そうや白鳥や、あの子は白鳥や。

幸福な未来への想像は、いつもここに突き当たり、哀しく折れる。いやかもしれない、ひでちゃんはいやかもしれない。男は顔やないと言うけれど、小さいうちは女の子はそういうことを気にするもんやよって、のぶさんを嫌うかもしれない。

けど——。えいは誰ともなしにむかつき、心の中で気を張る。けど、のぶさんはええ顔や。学者のお父さんや義兄^{にい}さんによく似た、男らしい立派な顔立や。——十二歳になる甥の、ひきしまった小さな口元や、隆々としてまっすぐな鼻すじを思い描く。

ああ、それなのに、と胸がいたい。人より立派な顔立なのに、それなのに。いっしょに暮らす姪や甥のなかで、自分がとりわけ、のぶさんが愛おしいのは、一つにはあの子が可哀想で可哀想で、たまらんせいかもしれない。

そういえばあの子、もう帰っておるやろかと、にわかに気になる。どこかで泣きべそかいてる気がする、胸がさわぐ。暮れかけて薄ぐらい座敷を通りぬけ、そこだけ電灯がついて明るい台所をのぞいた。姉のゆうと女中が、夕飯のしたくに余念ない。

妹の健啖を知るゆうが、なんやお腹すいて見にきたんかという風にニツと笑う。

「お稽古、おわりか」

「ふん。今日のおつけは何？」

「子どもみたいやな、アカエイとねぎや。もうちょつとかかるわ、お膳立しといて」

ゆうは鍋のふたを開け、なみなみと湯気だつ中身をみせる。柱の時計は、四時半をすぎている。古い土間にはねずみが出るので、害虫よけの生薬がそこらに置いてある。くすりやというのは、家の奥にまでくすり臭さが染みつく。

えいは姉にむかい、満足そうにうなずいた。アカエイとねぎは、のぶさんの大好物のおみをつけである。昨日は、下のふたごの弟たちの好きな惣菜だったから、今日はのぶさんと、姉なりに気をつかっているのが嬉しかった。どこにいるのか。早くふうふうと熱いおみをつけを腹いっぱい、のぶさんに食べさせてやりたい。

「のぶさん、帰ってるやろか」

「さあ、知らん」

おっとりしたといえは聞こえはいいけれど、まわりに気を廻すことのない鈍感なこの姉に聞いても知るわけはなかったと、えいはさっさと二階へ上がる。姉妹の力関係はむかしから、活発な妹のえいが上である。

二階は、道修町^{どしやうまち}から仕入れる漢方薬をしまふ物置場になっている。その他に六畳と三畳の小さな二間、くすりやと並んで家の表にひらく雑貨店であきなう駄菓子、文具、毛糸などの雑品を入れるもう一間がある。のぶさんはここに机を持ちこみ、自分の勉強部屋にしている。

下の階は、診察室もあって人の出入りがはげしく、いやだという。ほんの小さな頃からののぶさんは、押入や納戸、土蔵のような狭くて暗い所にひとりでこっそりというのが好きな子だった。それにしてもここは又、ひときわ臭うてかなん。よう、こんな所に長いあいだ居れるなあと、えいは妙に感心する。

あんのじょう、まだ帰っていない甥の机のわきには、陳皮や甘草、きゅうりのつる、すいかの皮などを干した薬草がどっさりと積み上げられ、独特のつんと目や鼻を刺激する揮発性の香りが部屋中にこもる。

それに混じり、思春期の男の子に特有の、青白いような生ぐさい匂いもただよう。えいは眉根をよせ、にぶく光る鰓川いたちがわの流れの見える小窓を開け、はたはたと袖をふって空気を動かしつつ、久しぶりに甥の勉強のようすをうかがった。

細かいキズの無数についた机の上にはうやうやしげに、やっとねだって書店で定期購読をはじめた「帝国文学」や「少年世界」の数冊がおかれている。父や兄から借りて読む「新著月刊」「新小説」「文芸倶楽部」「文庫」「太陽」なども、積まれている。

ことば喰い——そんな言い方があるとすれば、あの子にぴったり。細いからだで食べものも大喰いだけど、大福やぜんざいとと同じくらい、ことばを食べるのが好き。食欲に古いことばも新しいことばも、知り尽くし、食べたがる。この間から気むずかしい父親に取りついて、大きな辞書『言海』を買ってほしいとせがんでいる。

ほんになあ。つい数年前まで私が教える英単語のひとつひとつを紅い唇であどけなく唱え、グリムだのアンデルセンだのの童話を聞きたがっていたのに、今はもう、万葉集がどうたら古事記がどうたらとひとりきりでその先をずんずん進んでいる。

のぶさんの世界は、これからどんなに広がることか。たのもし。あの子もそのうち、東京へ出たがるかもしれん。そうやそうや、腐れ川の匂うこんな場末の町の、ひでちゃんもお母はんもおばはんも蹴